『人文学報』第122号（2024年６月）
（京都大学人文科学研究所）

翻刻資料Ⅴ

新村猛「佐々木時雄弔辞」

福　家　崇　洋*

【解説】本資料は，元・京都人文学園主事の佐々木時雄の逝去に際して新村猛が執筆した弔辞原稿である（「新村猛関係資料目録」D-53）。作成時期は1974年と思われる。本資料では，京都人文学園や関西文理学院との関わりなど教育畑を歩んだ佐々木の姿が主に描かれている。その後，佐々木は1962年から京都市動物園長を６年間つとめ，『動物園の歴史』（西田書店）などの著書を公刊した。本資料には多くの修正跡が見られる。収録にあたり煩瑣を避けて，修正を反映させた文面を掲載した。

弔　　辞 ―― 佐々木時雄さんのなきがらに向つて ――

新　村　　猛

ほぼ三十年来の親しい友であり，私どもの教育事業にとつてかけ替えのない大切な協力者であつた佐々木時雄さんが私どもの間から永久に去つて行かれようとする，この悲しい別離に際して，元の京都人文学園並びにその姉妹校として創立された関西文理学院を代表して今ここに佐々木さんのなきがらに向つて深い感謝と哀悼の言葉を語りかけることを皆様にお恕しいただきたいと存じます。

佐々木さん，敗戦の翌る年，昭和二十一年の春，戦前来の友人の助けを得て人文主義の精神に基づく新らしい教育運動を，担うべき学校，私が人文学園を建てて，その主事に適当な人材を迎えようとした時，あなたは京都大学時代の学友たちの推挙を受け欣然として，私どもの運動に参加して下さいました。それは，十年ほど前，友人たちと共に私が同じ京都で，「世界文化」などを発行して，専制政治と戦争にささやかな抵抗を試みたことをあなたがよく御承知になつており，私どもが戦後いち早く興した教育運動の趣意や目的をすでに理解しておいでにな

* ふけ　たかひろ　京都大学人文科学研究所

つたためであろうと思います。

そのようにして，人文学園の主事に就任して下さつたあなたは，校長である私にとつて比類なくよい理解者，絶好無二の補佐役であつたと同時に，専門や傾向のさまざまに相異なる多くの講師にとつても稀に見るすぐれた主事でした。そのことは当時学園の講義を担当したすべての人びとが等しく認めたところであると信じます。

それだけではありません。佐々木さん，あなたはたゞ普通の意味でのよい主事，経営と事務の中枢を占める適任者であるにとどまらず，生徒たちにとつては親切無比のよい教師でもあつて，生徒たちのいわゆる身上相談に喜んで乗つてやり，時には校長の耳に入れるのを憚るような経験の告白を聴いて懇切な忠告を与えて下さいました。従つて，人文学園の卒業者の多くは私どもの講義から受けた影響のほかに，あなたから温かい人間的感化をこうむり，今日まであなたに対してどれほど深い親愛と敬慕の気持を抱き続けているか，量り知れないものがあります。

また，人文学園発足の当初，教科目に加わつていた五つの外国語，英語ドイツ語フランス語，ロシア語，華語のほかに，あなたはエスペラントを教えることを提唱し，自らその授業を引受けて下さいました。この創意と努力から後に「原爆の子」のエスペラント訳が生れたことを私どもは忘れてはならないと思います。

ところが，人文学園は，多くのすぐれた講師とあなたのような比類ない主事を擁していたにもかかわらず，インフレーション，新円封鎖に加うるに占領軍の文教政策の転換などいくつか悪条件が重なつたため，創立後三年を経ないうちに経営難に陥り，とうとうあなたは京都市役所に，私は名古屋大学に奉職するという途を択ばなければならなくなりました。この時，あなたが不平も愚痴も泣きごとも一切いわれず，黙々として地方公務員になられたことを，その後ずつと長い間，私は相済まく申しわけなく思つて来ました。なお，ここでつけ加えようと思うのは，あなたが多年住み馴れた大阪市から御家族と共に，人文学園のために京都市へ移住して下さつたことであります。つまり，あなたがた御一家こそ挙つて人文学園に献身された家族であると申さなければなりません。

他方，人文学園の経営難を救うための対策として，予備校を，すなわち現在の関西文理学院を設立しようという提議がなされ，やがてそれが実行されるに及んで，佐佐木さん，あなたは当初の異論を投げすてて，周到な計画の下に設立を推進する任務をよく果して下さり，賀茂川学園と呼ぶ学校法人の理事会が成立を見るまでの間，運営委員会に加つて，関西文理学院発展の基礎をきづくことに陰ながら大きく貢献されたのであります。

しかし，不祥なことに，あなたの停年退職の時機が近づいた昭和四十二年秋，賀茂川学園に内紛が起り，その経営権が争いの的になつた際，あなたは学園の前理事長らを助けて，困難な事態の打開，関西文理学院の再建を計るために苦慮と努力を重ねられた末，私に，ついで現理

事長に，援助を求められました。この不祥な内紛の張本人が私とあなたの人文学園時代の教え子であつてみれば，私は求めに応じて援助に馳せ参じることをなおさら断わるわけにはゆきませんでした。

このようにして，五年この方，あなたと私とは再び教育事業を営む団体の同僚になり，あなたは初め評議員，後に監事として，昨秋十月に至るまで，熱心に役職を果し，文理学院の経営が今日のような安定に赴くことに寄与して下さいました。

なお，もう一つ，あなたから最近に受けた貴重な援助，協力は，日本ルーマニア友好協会京都支部設立のための活動でありました。

佐々木さん，あなたが三十年近い歳月にわたつて，私どもの事業の上に遺された数かずの功績をあらまし，ここで，あなたのなきがらを前に置いて語りました。あなたの功績は長く，いつまでも，消えないでしょう，などといつて私が結びの言葉とするならば，そしてあなたが未だ生きていて，私の言葉を聞いて下さるならば，恐らくあなたは持前の大阪弁で，そんなじゃらじゃらしたことをいつてくれるな，と応答するでしょう。